

台湾高校生日本留学事業第7期 留学成果報告

当協会の台湾高校生日本留学事業では、台湾の高校生が日本の高校に約11ヶ月間留学し、日本の高校生と同じ環境で生活を送りながら、日本の社会・文化・歴史等を学ぶ機会を提供しています。第7期生は、2024年7月20日に留学の全プログラムを終了し、帰台しました。今月号では、留学を通して成長したことや学んだことについて、4名の報告を紹介いたします。

最初、最後、そして最高の文化祭

早稲田摂陵高等学校 劉允謙

数学において、 $1 + 1 = 2$ というのは永遠に変わらない真理です。しかし、人と人との間では、 $1 + 1$ は、2を遥かに超える結果を生み出すことがあります。

団結というテーマは、この一年間で私の心にも深く響いたことです。正直に言えば、日本に来る前の私の日本に対する印象は「グループ活動を大切にする国民」というものでした。しかし、実際の日本はそれ以上にグループワークを重視しています。

台湾の学生として、グループワークの経験はありますが、日本の文化祭などの規模には驚かされました。なぜこのような違いがあるのでしょうか？私の考えでは、団体活動に対する皆の持っている態度にその理由があります。これは学生だけでなく、先生たちや親たちも、団体活動を非常に重要視していることによるものです。

文化祭の日はいつも九月ですが、日本の学生たちは四月から準備を始めます。「え！？じゃあ、日本の学生は勉強が必要ないのですか？」もちろん彼らも勉強します。放課後には文化祭の準備を行い、休日でも学校に行き、作品作りに取り組みます。困難に直面したとき、先生も手助けをしてくれます。五か月間、少しずつ皆で協力して準備を進めます。私は八月にこの学校に入ったので、

すべての準備過程に参加できたわけではありませんが、実際に文化祭の準備を体験したことで、日本の学生と先生がどれほど真剣に取り組んでいるのかを理解しました。

今回、私たちのクラスの作品は「スーパーメロ」というもので、参加者が物を探したり謎を解いたりするゲームです。有名なゲーム『マリオ』を模倣して、参加者がマリオのように様々なチャレンジを行います。ゲーム内には障害物があり、それを避けながら正しい道を探し、最終的にはプレゼントを手に入れることができます。

また、文化祭の準備は単に作品を作るだけでなく、協力やコミュニケーションの重要性を学ぶ良い機会でもあります。私たちのクラスでは、役割分担を明確にし、全員が自分の責任を果たすことが求められました。時には意見が対立することもありましたが、それを乗り越えることでチームワークが強化されました。

さらに、文化祭は地域の人々とも交流する場でもあります。保護者や近隣の住民が来場し、学生たちの努力の成果を見て回ります。これにより、学校と地域社会の絆が深まると感じました。私自身も多くの人と触れ合う機会を得て、日本の文化や価値観をより深く理解することができました。

この経験を通じて、私は団結の力と協力の大切

さを学びました。日本の文化祭は、単なるイベント以上のものであり、人々を結びつける大切な機会であることを実感しました。台湾に帰った後も、この学びを活かして、仲間と協力し合いながら様々な挑戦に取り組んでいきたいと思っています。

今回の文化祭は、私の団体活動に対する価値観に大きな影響を与えました。以前の私は、自分のことを優先し、団体活動は誰かがやってくれるだろうと考えていました。そのため、団体作業の品質にはあまり関心がありませんでした。しかし、文化祭の準備において、皆が一生懸命に取り組む姿勢を見て、その熱意に心を打たれました。誰も

がこの作品に力を尽くし、文化祭で素晴らしい思い出を作ろうとする姿勢が、私に初めて団体活動に積極的に参加しようという気持ちを芽生えさせました。私もこの作品を最高の形で表現したいと感じるようになりました。

この経験を通じて、私は自分自身の成長を実感しました。今後も、団体活動に対する積極的な姿勢を持ち続け、仲間と協力して目標を達成していきたいと思っています。そして、この文化祭で得た貴重な教訓を、台湾での生活にも活かしていきたいと考えています。



1年生と2年生の記念写真



ダンボールを使って壁を作ります

成長は自らの努力から

目が覚めた時、もう台湾に戻って三日くらい経ちました。まだ「帰ってきた」実感がありませんが、実際に自分の家族に一年ぶりに会ったとき、日本から離れたという事実に気づきました。この一年間の留学の記憶を見直して、自分の変化を深く感じました。その中で、最も印象に残ったのは、まさしく心の成長だと思います。

なぜかという、日本に行く前は、自分は少し泣き虫だと認識していました。何かを怖がってい

立命館高等学校 江尚観

るというか、自分がこのことをすれば、何が起って行くのかといっぱい杞憂し、最後に自分自身の最悪の想像にたどり着きたくないから、いろんなことを決定できませんでした。そのせいで、昔はたくさん貴重な機会やものを逃しました。例えば、友達と喧嘩して、相手が自分の謝罪を受け入れるかどうか悩んで、結局二度と連絡を取れなかったことや、前に日本人と交流する時、プレゼントを贈るつもりでしたが、相手が好きかどうかを怖

がって、送らなかったことなどです。こう考えると、自分が友達を一人ずつ失ったのかもしれませんが。ですから、私はこの悪い癖を意識して、この留学で遺憾を残さないように、出発前に何度も自分を変えると自己暗示しました。

しかし、最初はやはりうまくできなくて、何回も悪い予想をして、なかなか大切なことを決められませんでした。もし嫌われたらどうしよう、もしできなかったらどうしようといっぱい考えてしまいました。こう考えるたび、私は自分の部屋で何回も何回も反省して、もう一度自分がどうするのが良いか考えました。こういうことを繰り返して、少しずつ慣れてきました。この過程で一番難しいことは人との距離感だと思います。なぜなら、人の思いはみんな違って、それによって、人と交流する時の反応や行為も違います。もし距離感を縮めたら、相手はどう思うかと考えながら、私は何回も話しかけて、人との距離を段々わかってきました。

そして、私はコツを掴んでいって、何かを決めるときはまだ結果を予想しますが、以前より少なくなつて、さらにもっとポジティブな考え方ができるようになりました。単純に悪いことを考えるばかりではなく、いいことも発生する可能性を含めて、正しく判断することが大事だと気づきました。また、私は立命館高校の留学生担当の先生に

たくさんお世話になりました。たくさん応援してくれたり、いろんなことを教わったりしました。先生のおかげで、私は自分の考えを言葉で伝えるほうが、相手がわかりやすいとも認識しました。私は何が欲しいか、何の協力が必要か、きちんと話せることが大切だと思います。

それから、自分が成長したことが明らかにわかりました。何かを決めることに対して、もう二度と怖くなりません。喧嘩したらちゃんと誤解を解いて謝ればいい、別れるときはきちんと相手に素敵な思い出を残せばいいです。私のクラスメイトは、この一年の思い出を動画で編集して、最終日に流してくれました。動画を見たときには非常に感動して、涙が出てしまいそうでした。さらに、一年間の努力を振り返って、これらは無駄ではないとわかりました。私はクラス全員にお別れカードを作って、最後のプレゼントとして贈りました。カードを作るときは、昔送れなかったプレゼントを思い出して、今回は絶対送ると決心しました。

今の私は、一年前と違って、物事を決めるときはもう迷わず、はっきり自分の思いがわかります。この留学のおかげで、私の心は大きく成長して、未来の甘い実のためにいい種を埋めました。その実はこう言っています。「選択をするのは怖い、一番怖いのは決められなかった後悔です。」



SSGクラスのみんと撮った写真

11ヶ月の留学で見つけた自分らしい自信と成長の旅

東京都立白鷗高校 葉芄安

留学生活の11ヶ月間を通じて、私は日本の文化を深く理解し、日本人との交流を重ねることで、言語の壁を越えてさまざまな生活上の課題に取り組む経験を得ました。これらの経験は私の視野を広げ、自信を持って将来に向けて進んでいけると感じさせてくれました。短い期間ではありましたが、自分の成長を大いに実感することができました。

思春期の高校生にとって、人間関係は非常に重要な課題の一つです。留学生の私は、日本に来たばかりの頃、言葉の壁があって自分らしく素直に考えを伝えることができませんでした。クラスメートとのコミュニケーションもうまくいかず、友達を作るのは難しいと感じていました。しかし、友達を作りたいという気持ちが強く、積極的に他の人と話しかけるようにしました。そして、みんなが優しく接してくれ、すぐに遊びに誘いました。

出かけたのは出かけたものの、それだけで友達になれるとは限りませんでした。文化の違いもあるかもしれないから、何となく気まずい雰囲気が漂っていました。雰囲気を壊さないように、毎回ニコニコして楽しそうなフリをして、正直言って辛くて全く楽しくなかったです。良い印象を残すために本音を隠し、相手が聞きたいことを考えて答えました。しかし、結局11月の頃には心が疲れきってしまい、徐々に人との関わりを避けるようになりました。

だけど、一年という短い期間の中で迷っている時間はありませんでした。「やってみたいなら、やろうよ!」と思い、一人での旅を始めました。放課後に様々なことに挑戦し、週末だけでなく平日にも多くのことができることに気づきました。例えば、東京タワーに登ったり、グルメを楽しんだり、映画を観たりしました。また、休みの日には花火大会に行ったり、新幹線で東北へ旅行したり、ディズニーランドなどにも行きました。

正直、最初は、一人でいることがとても怖かったです。一人で道を歩きながら、「今、誰かに見られているのかな? 私、変に見えないかな? 高校生が一人でこんなことをするのは珍しいよね?」とよく考えました。しかし、色々なことを経験する中で、一人でいることが全くおかしいことではないと気づきました。むしろ、自分らしく充実した時間を過ごすことがとても大切だと感じるようになりました。

一人の時間を持つことで、沢山のことを考え、自分をより深く知ることができました。一番わかったのは、他人に好かれる前に自分自身を好きにならなければならないということです。そして、私は素直な自分が好きだと気づきました。他人に無理に合わせる必要はありません。その結果、友達もどんどんできました。しかも、私の本当の姿を好きでいてくれる友達です。

一人での旅はまだ続いています、体育祭やカ



帰国の日に見送りしてくれたお友達♡



JKといえばプリクラ!

ラオケ、昼休みなどはやっぱりみんなと一緒に楽しんだ方が楽しいです！今の私は、自信を持って「昨日一人でどこに行って、何をしていたよ！」と友達に話せるし、友達を遊びに誘うこともできるようになりました。ここまでうまく話せるようになったのは、偶然ではなく、日々の努力の積み重ねのおかげです。もし当時の私が逃避して諦めていたら、多分成長せずに無駄な時間を過ごし、自分の価値を感じられず、自信も持てなかったかもしれません。

留学を振り返ってみると、私はまだ自分自身でありながら、自信を持って自立した自分になった

と感じています。その理由は、孤独な数ヶ月間を経験したことで、一人でいる時も「できない」と思わず、とりあえずやってみることが大切だと学んだからです。その結果、自分には絶対にできるという自信が持てるようになりました。もし本当にできない時には、他の人に助けを求めることもできるようになりました。また、一人でも怖がらずにさまざまなことを楽しんで体験できるようになったと感じています。これこそが自立の象徴だと私は考えています。これからの人生も、新たな自分らしく挑戦し続けたいです。

留学を通して学んだこと、成長したこと

麗澤瑞浪高等学校 邱敬祐

岐阜県麗澤瑞浪高校での留學生活の中で最も印象深かったのは、部活動です。入学初日、国際オフィスの先生が私とオーストラリアの留学生を部活動体験に連れて行ってくださいました。私は先生に弓道部の見学を懇願し、その日初めて弓道場に入りました。道場の中に入ったとたん、外部とは異なる張り詰めた空気を感じ、独特な雰囲気魅了されました。他の部活動の建物とは違い、弓道部の道場は鉄筋コンクリートではなく木造で、伝統的な建築法が用いられており、濃厚な歴史の香りが漂っていました。私たちは道着を着用させていただき、道場の入り口に設置された神棚に向かって一礼をし、大きな声で「失礼します」と言うやと道場に入ることが許されました。そして、的に向かって一礼をし、「足踏み」、「胴造り」、「弓構え」、「打起し」、「引き分け」、「会」、「離れ」、「残身」という「射法八節」を行い、厳粛な雰囲気の中で部員の方々のご指導の下、試し射ちをさせていただきました。その時、私はある先輩の矢が的に命中した鋭い音に衝撃を受け、その場で弓道部に入部することを決意しました。

入部後、ゴム弓（ゴム製の弓）でイメージトレーニングを繰り返し、基本動作を徹底的に体に叩き込みました。その後、弓と矢を実際に手に取り、射法八節に従い、巻藁に矢を射つ練習を始めました。射場に立って初めて弓を引いたのは、入部5ヶ月後のことでした。これは台湾の部活動とは大

く異なる点で、日本の部活動は心と体が十分に整って初めて本格的に練習を始めることができます。それは、怪我をしないように周到に準備をするというだけでなく、これから取り組もうとする部活動に最大の敬意を払うという意味も含まれています。そして、日本の学生の部活動に対する姿勢も台湾の学生とは違い、勉学に対するのと同じくらいの情熱を部活動に注ぎます。また、部員は個人の成績や達成感を追求するのではなく、部全体若しくは学校全体の名誉のために力を尽くします。これは、私にとっては大きな学びでした。留學中に何事にも全力投球し、全体を思いやる姿勢を学べたことは、私にとって大きな財産となりました。

私の弓道の腕は8ヶ月間の特訓を経た後、東濃地区予選を突破し、インターハイ県大会に出場するまでになりました。出場者の中で留学生は私一人だけでした。自分の番が回ってきて射場に立ったとたん、緊張で体が震えました。一射目と二射目が的中し、緊張は最高潮に達しました。しかし、三射目も的中し、四射目を放とうとした瞬間、体に余計な力がかかり矢が的に外れてしまいました。その結果、残念ながら全国大会に進むことはできませんでしたが、弓矢の持ち方すらわからなかった入部時に比べると、私の弓道の腕には目を見張る成長があったと自負しています。また、弓道を通して日本の伝統武道の技術だけでなく、「礼

記射義」に謳われている「弓矢を持つこと審固にして、然る後に以って中ると言うべし、これ以って徳行を觀るべし」の姿勢を実践し、弓道の本質とも言える「礼節」を重んじ、「相手を慈しむ」精神を学ぶことで心も成長できたのではないかと考えています。

この11ヶ月間の留学生活で学んだことは、麗澤瑞浪高校が発行している「心のカレンダー」に記載されている最高道徳格言の一言でまとめることができます。それは、「断えず向上して、終身

努力す」です。部活動だけでなく、学校生活や寮生活を通して日々己を反省し、努力することで自身の欠点を改善する。そして、昨日よりも良い自分の実現を目指し続けることで、最高の道徳を身につけた人になれる。現状に安易に満足して胡座をかかず、それを改善し続ける気持ちを忘れず努力を怠らない姿勢こそが、人生で最も大切なことです。これからも、この学びを忘れずに精進し、日本の大学に進学する夢を必ず叶えようと心に誓っています。



一射入魂夢と希望を目掛けて